

# 米山梅吉記念館 飯館報

2011  
(平成23年)

秋

Vol. 18



三井報恩会一行視察記念。彦部村役場前にて。  
前列中央が米山、米山の右隣が石黒英彦岩手県知事、左隣が佐藤定八彦部村長

宮沢賢治が「雨ニモマケズ」の詩を詠んだ1931（昭和6）年、岩手県は大変な冷害に見舞われ、例年の半分程度しか作物が収穫できなかったという。この年の暮れに、岩手県知事に就任したのが石黒英彦である。石黒が在任中、二度の大凶作と大津波という自然の猛威が東北地方を襲ったが、彼はその都度全力で復興に力を尽くした。

1934（昭和9）年、三井報恩会が創立され、米山は、この報恩会の初代理事長に就任する。その目的は、社会・文化全般にわたりそれぞれの事業を支えることであった。その活動は、医療・福祉、学術研究・実験助成、農村振興等と多岐にわたる。

農村振興事業において、青森県東津軽郡西平内村と岩手県紫波郡彦部村が特定振興村に指定された。彦部村では物心両面から更生指導が行われた。その内容は、ほとんど一人で『セピア色の彦部一写真で見る彦部地区のあゆみ』をまとめられた長澤聖浩氏による本文に詳しい。当時を知る人からは、今でも「三井のおかげ」という言葉がよく聞かれるという。長澤氏らの尽力により、このような形で、歴史が残されていくことは、本当にありがたいことである。

上記の写真は1936（昭和11）年5月、更生事業視察のため彦部村を訪れた米山である。石黒知事の詠んだ歌に、次のようなものがある。「陸と海 住む里字は ことなれと 伊乃ち（いのち）かよえり 同し村ひと」今再び、日本村に住む私達が、互いにいのちを通わす時が来ている。



公益財団法人 米山梅吉記念館



## 館報第18号発刊に際して

理事長 渡邊脩助

平成23年3月11日の東日本大震災発生から、五ヶ月が経ちました。お亡くなりになられました皆様のご冥福を心からお祈り申し上げます。また、ご遺族と被災された皆様に、心からお見舞い申し上げます。

この度の震災は、国内観測史上最大のマグニチュード9.0という大地震と、それに伴う想定をはるかに超える大津波により大惨事となりました。さらに、福島第一原子力発電所の事故による放射能物質の拡散や風評被害と、時の経過とともにその被害の甚大さが浮かび上がります。島国日本の立地条件、そこに生活する人間の無力さに空しさを憶えましたが、この未曾有の災害に見舞われながらも人々の強い自制心によって地域社会の秩序が保たれておりましたことに、日本人・日本の文化の良さ、強さを改めて感じました。

2011-12年度のカルヤン・バネルジーR I会長は、強調事項に「家族」「継続」「変化」を挙げました。今回の地震で大きな被害を受けた方、風評被害や自粛による被害を受けた方、幸い今回は直接の難を逃れた方等々。地震関連の報道で、数をしてしか表されなかつた多くの人々に、それぞれの人生、それぞれの家族があります。その一つ一つに思いを馳せ、静かに鎮魂の祈りを捧げ、被災地の一日も早い復興を祈念してやみません。

日本のロータリーが、このような困難に直面するのは、今回が初めてのことではありません。大正12年9月1日、関東大震災が発生し、その存在

意義が問われました。世界各地のロータリークラブから支援を受け、東京RCはロータリーホームの建設、小学校や病院への寄付、殉職警察官遺族への援助を行いました。ここから日本のロータリーの本格的な活動がスタートしたといつても過言ではありません。今回の日本全国、世界各国からの支援の輪は、約90年前から続く私達のロータリー活動の延長線上にあるのです。

米山梅吉記念館にとっての変化は、平成23年7月1日を以て、公益財団法人へ移行したことあります。公益法人になり、税法上の寄付が認められやすくなりましたが、米山記念館の役割は、従前通り、米山精神の普及であることには変わりありません。

ちょうど、前回の館報を作成し全国に発送する、という正にそのとき、大きな地震が起り、残念ながら発送もスムーズにいきませんでした。しかし、年に2回発行の館報により、全国のロータリーの皆様に少しでも米山に触れていただきたい思います。4月の春季例祭も、今年の4月は開催を見合わせました。次回9月の例祭は、開催を予定しております。より多くの皆様のご参加をお待ち申しあげます。例祭の開催により、より多くの米山ファンの集う場を提供し、ささやかな活動ではありますが、これからも地道に続けていきたいと思います。今後とも皆様のご支援をよろしくお願ひいたします。

2012年9月1日、関東大震災が発生し、その存在

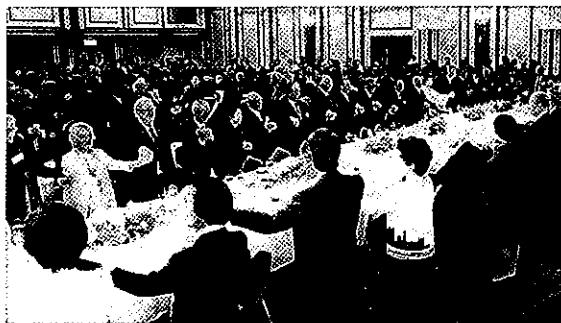
## 回 想

### 米山記念館と東京ロータリークラブの協力関係

宮本四郎(東京ロータリークラブ)



東京ロータリークラブは昨年度創立90周年を迎えた。90年というのは決して短い年月ではない。それも世界中波乱万丈の時代を含め幾多の困難を克服して、日本のロータリークラブがここまで発展を実現したことは、まことに立派なことであると思う。お蔭様で東京ロータリークラブ(以下「RC」という)も90年創立例会と祝賀会を、400名に近い来賓、会員及びその家族の参加をえて盛大に持つことができた。また記念行事として米山記念奨学会、米山梅吉記念館等に寄付、記念史の発行、さらに創立100周年記念事業の奉仕プロジェクトを何にするかの研究なども行っていることをお知らせしておきたい。



東京RC 90周年記念例会

私は入会したときから、諸先輩に東京RCは米山梅吉初代会長によって、相互理解と親善を世界に拡げようとの理想に燃えて創られたものだ。米山さんは偉い人だった。それを知りたければ、富士の裾野の長泉にある米山梅吉記念館に行けばよいと教えられてきた。米山さんについて何も知らなかった私は一人で勉強を続けるとともに、やがて東京RCの会員にとっては「米山梅吉」はわれわれの原点であり、米山梅吉記念館はわれわれの故郷の家との気持ちを抱い

ていることを知った。

その後、1993年度私は東京RCの米山委員長を拝命した。同時に親睦委員長になられた熱心なロータリアンである黒澤宏会員と相談して秋の墓参と米山梅吉記念館見学の小旅行を計画した。その頃記念館は坂本豊美理事長、幾田裕男常務理事の時代だった。たまたま先日「米山記念館館報2011年春号」を見たところ静岡東RCの坂本豊美氏の回顧談が顔写真入りで掲載されているではないか。一読して当時の環境とお二人のご苦心の程を思い出し、私は胸に溢れる懐旧の念を禁じえなかった。しかも、もう幾田さんは故人となられてしまった。

先程の小旅行に戻ると、墓参と記念館見学のあと坂本理事長以下関係者代表10名と懇談の機会があった。記念館側の話は、創立当時の経緯と最近の状況のことであった。最大の問題は来訪者が急増し、管理は地元の長泉RCにお願いしているが手に負えなくなってきた。困ることは、とにかく建物が狭いことである。60名来ると言中に入れない。雨が降ると外で待ってもらう。第二会館を造れという声もあるがとても我々の手に負えない。しかし検討中である。来年は創立25周年のうえに米山翁没後50年にあたる。意義ある行事をしたいと考えているが、東京RCには創立のときから何かとご支援を頂いているところ今後ともこの関係を広げていきたいとのことであった。東京RCからは諸戸精文元会長が代表してこの度の設営に感謝し、今後の友好関係の発展を祈り金一封が贈られた。

翌年3月、記念館の坂本理事長から東京RCの徳増須磨夫会長宛本年は記念館25周年に当たるので記念の座談会と記念祭を行いたい。ついで、まず座談会に代表を出して欲しいとの依頼状が来た。徳増会長から指名を受けた私は5

月、この会合に参加した。集合したメンバーは25年よりも前に本件に直接関係した個人、団体、会社を問わずそれらの代表者で米山梅吉翁の友人、ロータリー元ガバナー、ガバナー、会長、地元代表者等々詰々たる長老クラスの人々15名であった。会合の趣旨は25年経って記念館創立時の記録も情報も次第に消滅する頃となった。この際集まつた方々から過去、現在、及び将来のビジョンについて忌憚のないご意見と資料および情報を出していただきて後世への参考に残したいとのことであった。会合は2時間たっぷり歯に衣を着せぬ議論が続いた。関係者の意見をまとめると、いろいろ困難はあるが是非とも第二会館が必要である。については秋の記念祭がすんだらこの問題に向かって出発しようというのが本音だとの合意が成立した。

ついで9月17日、記念館開館25周年記念行事の墓前祭、記念式典の祝宴が盛大に行われ、東京RCからは永井典彦会長以下9名が出席した。東京RCには米山翁のご親戚が二人おられるがこのときは荒川健夫会員（故人）米山翁の孫が出席された。



米山記念館開館25周年記念式典

翌1995年7月、記念館坂本理事長から東京RCの吉國一郎会長宛書簡あり、記念館問題等のため理事を増員する必要があるので貴クラブを代表する理事候補者一名を推薦してほしいとの依頼であった。吉國会長は理事会に図って決定され、当時副会長であった私に下命された。早速8月長泉で理事会が開催され理事として初めて出席、以来頻繁に長泉へ通うこととなつた。

この頃記念館の坂本理事長は、時は熟したと判断、内藤ガバナーにあげ両名で第二記念館設

立事業に対する寄付金募集を全国に呼びかけられた。勿論手順を踏んで一度ならず二度までも。しかし反応は、はかばかしくなかった。坂本理事長始め執行部はさぞかし胸を痛めておられたことであろう。しかし、この頃大口寄付金が次々と決定していった。米山奨学会5千万円、長泉町2千万円それに東京RC2千万円である。坂本理事長の顔にこれでいけるとの自信が戻ってきたであろう。さきに述べた坂本理事長の回顧録にこのあたりのことが鮮明に書かれている。

東京RCでは長年にわたって長老が先に立つて墓参と記念館の見学を重ね、上層部は大体の情勢を理解しておられた。私は本件を担当するようになってからパイプ役として両者の意思の疎通を図ることに努めた。たまたま時節が東京RC創立75周年という機会にあたり、吉國会長の大英断で、記念事業として理事会の賛同を得て実現したことはまことに幸いであった。しかし、このことも本をただせば、米山梅吉に始まる記念館と当クラブとの長い間の信頼関係の賜物だったと思う。

1998年4月、記念館新館の落成式が立派に執り行われ、東京RCから鈴木忠雄会長以下が参加された。それからもう10数年経った。この先も記念館が日本のロータリアンの故郷として発展されるようにまたわれわれもできるだけのお手伝いをしたいものだと思う。

初めて私が米山梅吉翁の墓参に伺ったとき自然石を削った平面に次の翁の句が刻まれていた。

「いさかいもなく漫々の青田かな」

私はいい句だと心うたれて、なぜ墓石に句があるのかと聞いたら、終戦後で資材もなく別荘にあった句碑を移して墓石としたとのこと、なるほど、このほうが米山翁らしい感じたことである。



米山梅吉の墓碑

## 私の米山梅吉

阿部志郎

(神奈川県立保健福祉大学学長)



白雪の秀麗富士を仰ぎながら、心洗われる思いで長い間願ってきた米山梅吉記念館を訪れる。2011年2月の寒い日のこと。

予想したより広い敷地に、

普通の民家づくりかと想像していたのに、瀟洒で立派な記念館が建っているのに瞠目する。この地は、かつて、梅吉の義父の長屋門があつたところで、さぞかし由緒ある屋敷だったのではないか。

故郷とは、人間として帰るべきところで、誰であれ、遠慮なしに方言を話し、心を開きあう地を指す。

米山は、最後にたどりついた長泉を安住の地と思い定めたと思われる。まさに、記念館はその象徴として存在する、というのが、敷地に立ち記念館を外から眺めた私の第一印象。

チャーミングな学芸員市川真理さんに温かく迎えられて館内を巡る。市川さんは若いのに歴史に通曉し、質問にも適確に答えてくれる。特に、米山梅吉をまるで身内ででもあるかのように親しみと尊敬を込めて語る市川さんのアイデンティティに感心する。

このような学芸員に記念館が守られているのは嬉しいことだ。そして、これを支える地元のロータリークラブの真摯な取り組みに脱帽する。

写真、年表、資料、説明文、遺品の整然とした配列は見事で、米山とそれをめぐる人脈、時代状況、功績が簡明に理解できるように配慮されている。

私は子どもの時代に引き戻され、展示物のひとつひとつに懐かしさがこみあげてくる。

小学校5、6年の頃、青山学院長をしていた父親の代理で、正月元旦の朝早く米山邸に年賀に伺い玄関の名刺受けに黙って一枚の名刺を置く。ただそれだけのこと。同じ三井の重役であった隣の福井菊三郎邸では、玄関に和服で座っている家令さんに深々とお辞儀をしたのを憶えている。福井は米山が三井信託の社長の時の監査役という仲。

米山の邸は、当時としては珍しい大きな洋館で、私が通った青南小学校のすぐ近く。向かい側に根津嘉一郎（現在の美術館）、黒木大将邸と並ぶ屋敷町

だった。米山と交友のあった間組の小谷清邸、斎藤茂吉の青山脳病院も路地を距てたところで、青山南町に位置していたが、敗戦の年3月10日の大空襲で廃墟と化した。すべてが一。

大柄ではないが、米山の威厳のある温顔は、私の胸に焼きついている。

ちなみに父は終生ロータリアンであった。服部礼次郎氏が「あなたの父さんと同じクラブでした」と話しかけてくれたが、年老いてから父は、お世話になつたらしい。なお、服部夫人は、米山の緑岡小学校の第一期生だという。

緑岡小学校は財界人である米山の夢と教育者である父の理想が共振した産物とみられている。

記念館の写真をみていううちに、ロータリーのガバナーであった小林雅一、東ヶ崎潔、湯浅恭三の面影が鮮やかに浮かんでくる。

1951年、アトランティック・シティでのロータリー世界大会に戦後初めて日本を代表して参加した小林雅一夫妻をニューヨークで案内したこと、東ヶ崎氏の晩年、赤坂見附のマンションにお見舞いに訪問したこと、国際キリスト教大学の湯浅理事長を理事の一員として補佐した思い出などなど。

目賀田種太郎男爵との関係が、私の目を引く。目賀田を委員長とする経済財政の遣米調査団のメンバーに年若く無位無官の米山が抜擢されたのが、パンカーとして国際的に活躍する契機となった。目賀田夫人は勝海舟の娘で、記念館から目と鼻の先にある日本最初のハンセン病療養所である、神山復生病院に夫妻で温かい目を注ぎ支援の手を差し伸べ続け、それは、娘、孫にまで受け継がれている。その頃世間から忌み嫌われた病者を励ます稀有の篤志家であった。



緑岡幼稚園第1期生の卒園式  
後列中央が米山梅吉、その右隣が阿部義宗氏

この療養所には、日本カトリックが生み出した秀逸の知性といわれた岩下壮一神父が院長として献身したのは知られているが、壮一を復生病院に結びつけたのは父親の岩下清周。清周は、関西財閥の雄とよばれた北浜銀行頭取で、復生病院近くに隠居した土地20万坪は聖心女子大学に寄附されている。清周も、目賀田とともに復生病院を援助した秘話もある。

岩下と米山の接点は詳かではないが、二人とも目賀田とともに復生病院を後援したスポンサーにほかならない。清周には、世に出る前の豊田佐吉、森永太一郎を援助した秘話もある。



**岩下壮一** 岩下と米山の接点は詳かではないが、二人とも目賀田と深くかかわっているのに興味を覚える。

米山は、三井財閥が設立した三井報恩会の理事長を引き受け、全国にあるハンセン病療養所を歴訪する。交通もままならぬ「地の果て」に隔離されている病者を、すでに高齢の身となった米山が、自分で足を運び慰めたのに感嘆する。

報恩会は、戦前・戦後にわたって企業の一番大きな支援財団で、3000ベッドを寄贈(全ベット数の3割弱)した。このことは、なぜか、日本のハンセン病の歴史に記録されていない。

米山が、他の企業財團に例をみないハンセン病援助という異色の事業に手を染めた理由はなにか。

国の貧弱な対策の問題性を見抜いた洞察力、それを実行に移す決断力を評価すべきだが、社会から顧みられず偏見と差別に苦しむ人々へ米山の心の優しさがからしめたとすれば、特筆に値する。

それに加えて、遊佐敏彦の助言があったと推察する。遊佐は、内務省の初代職業紹介所長で、斯界では著名な人格者として認められていた。この遊佐を報恩会に起用したのは、米山の慧眼と言つてよい。

米山の人格形成に深い影響を与えたのは、本多庸一とポール・ハリスではないのか。

東京英和学校(現在の青山学院)で本多に私淑した時間は長いとはいえないが、米山の生涯を左右するほどの感化を受けている。

本多の関係で米国メソジスト教会のオハイオウェスレアン大学に留学することから米山の道は拓かれていいく。

三井銀行時代、窓口で現金を支払われた客が「札が一枚多いよ」と返すと、「当行に間違ひはございません、お受け取り下さい」と客に戻し、自弁で穴埋めをして銀行の信用を守ったと伝えられる逸話がある。若き日

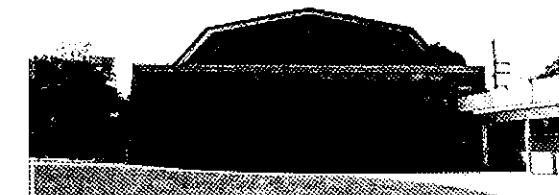
の米山の気骨が示され面目躍如たるものがあるのでないか。そういえば、土曜日を半日勤務にする半ドンは米山の提唱と聞いたが、うべなるかな。

現役を退いた後、緑岡小学校を、春子夫人は緑岡幼稚園を、青山学院の構内に建設し(わが家はその中間にあった)、お二人は校長、園長を務めた。言うまでもなく無報酬で。それ以前は長男東一郎を記念する米山(柔剣)道場が学院の片隅に見出されるのみであったが、小学校はクローバー、タンポポの花咲く花岡山の緑に囲まれた最適な場所を占めた。

この建築に三井の退職金(噂では100万円)をはたいている。しかも、保護者を含め一切寄付を仰がず、教職員人件費のため書画骨董を処分している。「母親が自分の着物を質入れした」と語った令息桂三氏の感銘深い言葉を市川さんが教えてくれた。

熱心なクリスチヤンだった春子夫人には、戦後2回程東京でお目にかかる。

戦争中、児童の疎開先に選んだのは、伊豆湯ヶ島の落合楼(青山学院関係者)と本多の故郷弘前であった。この小学校、幼稚園が現在の青山学院初等部、幼稚園で、初等部は礼拝堂を「米山記念」として献げている。



青山学院 米山記念礼拝堂

教育に対する清廉な使命感は、本多への恩義が米山の奥底にあったとしか思えない。

三井報恩会で、国民病といわれた結核の新薬(セファラチンと記憶しているが)の開発普及に努め、疲弊した農村の復興を助け(青森県平内町に感謝の石碑が残されている)、福祉に貢献したのは、ポール・ハリスの思想と共に鳴したからに違いない。それが奉仕団体としてのロータリークラブの日本への導入につながったのではないか。

さらに、ハリスによって米山の国際的視野が広げられたことも疑う余地がない。

私が、なにより米山梅吉に魅せられるのは、名誉や蓄財を目標とせずに、資力のすべてを投じて小学校、幼稚園を開設し、財界人の地位を抛ってひとりの小学校長として人生を閉じた清冽にして高貴な生き方にある。

この高潔な品性は、子ども心にもひしひしと伝わつ

てきたのだと思う。そこで、子どもの時から、この米山に憧れ、私は実業家になるべく大学で経済学を専攻し就職先にも見通しがついていた。

なのに、計らざる摶理というか、前述の神山復生病院で看護婦の病者に寄り添う美しい行動に感動した私は、福祉へと方向転換し今日に至っている。すなわち、それから数年後まで名前さえ知らぬ看護婦との出会いが、私を思わぬ人生を歩ませることになった。この人は、600体の病者とともに病院の墓地に葬られている。その名は、日本のマザーテレサと称えられた井深八重。米山をモデルにした実業家の夢は潰えたが、与えられた新しい志も米山の意に適っていると勝手に思い込んでいる。

ともあれ、私の胸奥で米山に対する憧憬は未だに変わることがない。記念館に足を踏み入れ、米山梅吉がわたしのうちに豊かに流れだすを感じ、満たされる思いであった。

記念館を建て維持しているロータリアンの米山への

敬慕とそれを実践に移すエネルギーは、私の心に強く響く。このような後輩に恵まれた米山は幸せな人だ。

ただ、青山に育った私としては、青山学院が記念館に対して何等の役割も果たしていないので寂しい気がする。

私のようなロータリーに関係ない者にとっても、記念館は一見の価値があるのは言うに及ばず、ロータリアンは是非尋ねるべき必見の記念館であると強調しておきたい。

米山への畏敬の念をもつロータリアンの純粋な感性と情熱的な行為を語り伝え、米山の人物像を通してロータリーの精神を次の世代へと継承することが、記念館の存在意義ではあるまい。



井深八重

## 三井報恩会と岩手県彦部村

紫波町文化財調査委員

長澤聖浩



岩手県の県庁所在地である盛岡市の南20キロ、県土のほぼ中央に「紫波町」がある。

西側に奥羽山脈、東側に北上高地の山々が連なりその中央を東北一の大河「北上川」

が滔々と流れる昔からの稻作地帯である。

この紫波町の北上川東岸に「彦部地区」がある。現在600世帯程が暮らす農村部で、昭和30年の町村合併までは「彦部村」と称した。

今から約800年前に、親鸞聖人の高弟是信房が浄土真宗を布教した地で、石ヶ森という山の上には是信房の墓所があり、今も参拝者が絶えない。

地域の先輩に作家であり、音楽評論家でもある野村胡堂がおり、集落の小高い丘の上には「野村胡堂・あらえびす記念館」がある。

さて、この彦部村は昭和10年三井報恩会より「特定振興村」に指定された。特定振興村とは、経済更生のモデル農村の事で、これには当時の時代背景が深く関わっている。

昭和5年の経済恐慌による米価、生糸価格の大暴落に始まり、昭和8年3月3日の三陸大津波、昭和9年



の当時の理事長 経済更生村標柱(昭和10年(1935)頃)

が、米山梅吉氏であった。

彦部村では当時の村の1年間の予算が21,700円の時に、三井報恩会より5カ年で35,800円という巨額の資金が援助された。

昭和10年2月13日には、彦部小学校にて三井報恩会よりの指定伝達式が行われ、三井報恩会山口常務理事、石黒英彦岩手県知事臨席のもとに多くの村民が参加し、盛大に式典が挙行された。



特定振興村指定伝達式(昭和10年(1935)2月13日)

岩手県庁内には「彦部村振興会」が設置され、官民一体となっての取り組みが始まった。

彦部村が指定された理由は、監督官庁である県庁に近いという事、当時の平均的な中堅農村であったという事ともう一つ、当時の村長の指導力にあった。

当時の村長は佐藤定八と言い、大正2年より昭和20年まで通算で28年間村長を務められた方で、村民の信頼が厚かった。

毎朝役場にて官報に目を通し、気になる記事があると、すぐに電話で県庁に問い合わせるといった具合で、県庁内では「彦部の村長は問い合わせが早くて困る。あれは佐藤村長でなく査定村長だ」と噂される程であった。

当時の石黒知事は、この定八に着目し、その実行力と指導力に期待して、彦部村を指定したとの事であった。

当時の事業の実施状況については、三井報恩会が昭和15年に発行した「特定振興村彦部村の実績」という本に詳細に記録されている。それによると、具体的な事業内容として以下の4事業を実施している。

#### ① 指導及び実行組織

村内15地区に実行組合を組織し、農作業を共同で行い、毎月常会(会合)を行う。

#### ② 教化及び精神作興

六原青年道場(現在の岩手県立農業大学校)に村の青年達を入学させ、中堅人物の養成を図る。

#### ③ 生産及び経営改善

有畜農業推進のため、乳牛、綿羊、アンゴラ兎を導入し配布して飼育させる。

共同作業所を設置し、藁工品の生産を行う。

#### ④ 社会施設及び生活改善

春と秋の2回「農繁託児所」を開設する。  
台所改善を行う。

これ以外にも様々な事業を展開したが、事業の中心は有畜農業と藁工品の生産の推進であり、農家の副収入源を確保し、冷害等の気象条件に左右されない農業経営を目指した。

また、将来的な展望を見据えた中堅人物の養成、作業効率の向上を図る共同作業等は、現在でも参考となる先進的な事例であった。

乳牛の飼育は、北海道より導入したホルスタイン種20頭で始まり、村内の各農家で大切に育てられた。

役場では集乳用のオート三輪を購入し、毎朝牛乳缶に入れられた牛乳を回収した。

集められた牛乳は、飲用だけではなく、一部は村内の小野文真宅にてチーズやバターに加工され、盛岡市内の「公会堂多賀」という洋食店(現在でも営業している)に納められた。

綿羊の飼育は、三井報恩会がオーストラリアより輸入した綿羊百頭を導入して始まり、村内には綿羊の飼育小屋と、ホームスパンを織る加工場が建設され、飼育から加工まで本格的なホームスパンの生産が行われた。



川前橋を渡る綿羊達(昭和10年(1935)頃)

また、村内4カ所に建設された共同作業所には、藁打機械、製糸機、製糸機が設置され、農家の女性達が、自宅から藁を持参して、ムシロを織った。

生産されたムシロは、厚い物(耳かきムシロ)は、穀物の脱穀、乾燥の際の敷き物、薄い物(ガッチャムシロ)は、浜でイワシを干す際の敷き物として売られて行った。

村人達が一番喜んだのは台所改善であった。それまでの農家の台所は、窓がなく通風の悪い薄暗い状態で、あまりに手元が暗いので、味噌汁の具に誤ってタワシを入れてしまったという笑えない話も起ったのであった。

村では専門の大工を養成し、従来の土壁をガラス障

子に改め、レンガ積みのカマドを作り、土間をコンクリートにする等の改善を行い、明るく衛生的な台所となつた。

村には他村からの視察が相次ぎ、斎藤実元首相、秩父宮殿下も訪れ、岩手県の模範となつた。

指定より1年後、昭和11年5月には、三井報恩会の米山梅吉理事長一行が、彦部村の更生状況の視察に訪れた。

当日は、県庁の自動車で、石黒知事の案内でいらして、乳牛、綿羊の飼育状況、共同作業所の使用状況等を視察された。その際、彦部村役場前にて、米山氏を中心にして撮影された記念写真が残されている。(表紙参照)

この訪問の際、米山氏から彦部小学校の児童全員に一箱ずつビスケットが贈られた。

これは米山氏の手土産だったのであるが、当時、ビスケットなど食べた事もなかった子供達は大変に驚き、喜んだとの事だ。米山氏は、ハンセン病施設などを訪れる際には、ポケットマネーにて必ず手土産を持参したとの事で氏の人柄がうかがわれる温かいエピソードである。

彦部村の更生事業は昭和10年度から14年度までの5カ年間行われ、確実な成果を上げ、今日の彦部地区の基礎を作った大事業であった。

当時を知る人達は80代以上となったが、今でも三井報恩会と米山梅吉のことの大切に思い感謝している。

三井報恩会の事業は、岩手の近代史にとっても重要な出来事であり、今のうちに資料をまとめて、後世に残し伝えていかなければならないと思っている。

## セピア色の彦部 一写真で見る彦部地区のあゆみ

岩手県紫波町彦部地区の彦部公民館にて発行した写真集である。

旧彦部村より収集した明治30年代～昭和40年代の写真292枚を掲載している。

「政治・人物」「経済更生指定村」「学校」「消防」「戦争」「農作業」「住まい」「冠婚葬祭・暮らし」「産業・交通」「名勝・旧跡」の十分野に写真を見やすく分類して構成してある。

この中の「経済更生指定村」とは、三井報恩会の援助により行った農村振興事業の事で、当時の事業関連の貴重な写真26枚が掲載されている。

これらの写真の多くは、当時の彦部村長故佐藤定八氏宅(現在の当主佐藤剛氏)にてアルバムに貼って大切に保存されていたもので、このアルバムの中より米山梅吉氏が彦部村を訪問された際の写真が発見された。(表紙参照)

掲載されてある全ての写真に、撮影年月日、所蔵者名、内容が記されているが、これは後世の資料的価値を考慮しての事であり、一枚ごと写真の内容を文献や当時を知る人達より聞き取りによって確認していく作業に膨大な時間を要



した労作である。

写真はその時代ごとの歴史の証であり、彦部地区の歴史書としてだけでなく、岩手の農村の近代史としても貴重な一冊である。

#### セピア色の彦部

一写真で見る彦部地区のあゆみ

著者 長澤聖浩

発行 平成23年3月20日

紫波町彦部公民館

体裁 A4版 155頁

# 青年米山梅吉の サンフランシスコ滞在時代（後編）

井口 賢明（沼津北 RC）

## 【福音会の概要】

ここで、福音会のことを見てみる。福音会は、サンフランシスコにおける邦人のための扶助団体であった。キリスト教メソジスト派と関係はするが、キリスト教会の組織の一部ではない。ただ、教会側は、自分のための普及活動に役立つし、一方福音会も異邦の地にあって、自分の事業を展開するためには教会が心強い後盾であった。ある意味お互いに利用し合う、緊密な不即不離の関係にあった。この関係も、牧師メリメン・コルベート・ハリスが1886（明19）年6月、カルフォルニア州一帯のメソジスト派教会の日本人伝道の総理となり、福音会の指導に及んで、極めて強いものとなつた。しかし、いざれにしても、福音会は、教会の事業とは別のものである。

この福音会は、1877（明10）年、美山貫一によって組成された。美山は、1847（弘化4）年10月25日、長州の萩で生まれ、藩校明倫館で学んだ。國土風の人物であった。この時代の進取の志のある若者の多くがそうであったように、美山も渡米の志を抱き、1875（明08）年8月5日、28才でサンフランシスコに渡った。

当時のサンフランシスコは、カルフォルニア州で金山が発見され、米国各地や中国人の出稼ぎで賑わっていた。1855年（安政02）の暮の時点では、中国人が4万2千人と多かった。しかし、日本人は少なく、ずっと下った1874（明07）年で、男68人、女8人、子供4人という程度であった（サンフランシスコ領事代理の調査）。1880（明13）年のアメリカ国勢調査で、在米の日本人148人のうちカルフォルニア州で86人だったという。一方、その年、カルフォルニア州の中国人は、8万3千人で、カルフォルニア州の人口86万人のおよそ1割という状況であった。このような中国人の増加により、排斥運動が起り、1882（明15）年には、中国人の移民を禁止する法律が制定された。したがって、以降、中国人の入国ができなくなったが、以後も脱法的な方法で（身内の呼寄せとか米国籍を取得したとか）の入国者があり、以前ほどではなかったが、相当数の渡航者があった。このように増加する中国人に対する排斥運動は、すさまじいもので、ときには、傷害や殺人事件にまで及んだ。

美山は、牧師ギブソンの知遇を得て、ワシントン街にあるその中国人伝道館の最下層の部屋に住み、在住していた日本人の同胞と語らう毎日となった。ギブソンは、メソジスト派の牧師として、以前、中国で伝道

をしていた。帰国した後、中国人伝道館を開き、中国人のための布教、扶助の活動をしていた。いわば日本の武士道的なところもあって、弱い者を助けるという意味で、先の中国人排斥には身をもってこれを守るというようなことでもあった。

美山は、ギブソンの洗礼を受け、キリスト教信者ともなった。やがて、美山は、これら日本人の中心的存在となる。そして、1877（明10）年10月6日、中国人伝道館の最下層の部屋を拠点に、日本人の米国における最初の邦人扶助のための共済団体「福音会」を結成した。



福音会の原点となったサンフランシスコ中華美以教会

そのときの会則は、ごく簡単で、次のようなものであった。

- 名称 福音会と称す。
- 集会 每土曜夜集会を開き、聖書の講義及演説をなす事。
- 会費 会員は会費を25セントとし、毎月最後の土曜日に徴収する事。
- 役員 会頭、会計、書記、各1名を置き、事務を執る事。
- 総会 年2回総会を開き、諸般の報告及役員を選舉する事。

福音会は、外国人に依存しない独立の邦人団体であったが、当面は、中国伝道館の下層室を借りて、そこを会場かつ寄宿代わりとしていた。英語の夜学校も始めた。会員は、選りすぐりの一騎当千の士で、出稼移民という風ではなかった。

美山は、日本から船が来ると、日本人が来ていないかと、波止場に出て待っていたという。そして、そのころ、サンフランシスコにホテルがなく、大抵この福音会の寄宿舎に泊まつた。

しかし、時の経過により、福音会のなかに、宗教上

の違いが生じるのは仕方のないことであった。一方、師であるギブソンは、美山の信仰を本物とし、とかく他の会員と異なる扱いをした。これが、隔てを一層大きくし、1881（明14）年5月、一派が分離した。分派した会は、タイラー街（後のゴーデン・ゲート・アベニュー）に移ったので、タイラー福音会といわれた。

残留した者は、12名であったが、年余を経て、40名となつた。さらに、寄宿舎も拡張し、賄部も設けるようになつた。そのようななかでも、美山は、日本人同志が結束するというだけでなく、外国にあって、日本の国威を輝かすため、団体生活のなかで道徳的水準を常に高く維持する必要があるという考えを貫き、これを会員に求めた。会員それぞれの考え方、職業は、十人十色である。血氣盛んで、そのような美山に反対するというだけでなく、信仰上の不満も生ずるようになる。いつまでも、ギブソンの中国人伝道館にあることをよしとしない者もでるようになる。一方、美山は、偽りや不信を許さないという武士気質である。福音会は、再度分裂する。1883（明16）年8月のことである。このとき分派した者は、ステベンソン街に、ステベンソン福音会を組織した。このときの残留者は、16名であつた。

このように、美山の創った福音会は、6年で3分裂し、福音会という同じ名前の団体3つが鼎立することになった。しかし、ステベンソン福音会は、会員の減少などで、やがて維持できなくなり、タイラー福音会に吸収されざるをえなくなつた。そして、タイラー福音会も1886（明19）年には解散し、新団体として、日本人基督教青年会となつた。したがつて、この後は、もとの福音会だけとなる。

福音会は、再分裂後もよく活動し、1884（明17）年3月15日には、オークランドに支会を設けた（この支会は、1887（明20）年秋、意見の衝突により本会と分離する）。そして、1886（明18）には、会員数111名となつた。この年3月には、中国人伝道館の地下から、隣家の2階に移つた。部屋がいくつもあって、寄宿舎となつていた。1室4、5人、食事付で1日25セント、食事抜きだと、10セントであった。会長室があり、隣りは幹事（舍監みたいなもの）の部屋である。

美山は、1884（明17）年秋、帰朝した。帰朝の目的は、両親に対する伺候と結婚、そして有為の青年の渡米の奨励である。美山は、帰国中の1884（明17）年暮れ、築地明石町の美以教会で、東京福音会の発会式を行なつた。そして、夜学の英語学校も開いた。渡米する者の準備のためのものである。やがて、福音会は、建物を得て、銀座の竹川町に移転する。生徒の数は、7、80人。毎晩夜7時から9時まで、英語の授業があつた。この東京の福音会は、海を渡る者のために、心と知識の訓練所となつたという。この夜学校に通つてから、海外に飛び出す者が多く、その数、数百に達した。

米山も渡米の準備のため、1887（明20）年になって、ここに通つた。

美山は、1885（明18）年3月、新婚の夫人を伴い、再度サンフランシスコに赴く。このとき、青年何人かが同行した。

そのころは、渡米者は、先づホテルに入り、落付いたところで、大概この福音会の寄宿舎に来た。賄いもあり、働き口も先方からここへ申込んできた。渡米者の多くは、学僕生活で、1週1ドル、皿洗いだと1週3ドルか4ドルである。



当時日本人が利用したパレスホテル

そして、日本から帰国したハリスが1886（明19）年6月、カルフォルニア州一帯のメソジスト派教会の総理となつた。その年9月、日本人美以ミッションの設立が承認され、美山がその主任伝道者となつた。それにもとない、ハリスが福音会をも指導するようになつた。このころ、福音会の名称が「桑港美以福音会」という名称になつたと思われる。なお、この日本人美以ミッションは、1890（明23）年、桑港美以教会となり、その付属に、美以夜学校も設けられた。

日本人美以ミッションと福音会は、1886（明19）年12月、ゼッキー街の中央教会の別館に移つた。下の一部は講堂、他は夜学校で、講堂は2,300人入るものであつた。上は寄宿舎で、5、60人が泊まれた。会長室の廊下を隔てて、ハリスが来たとき泊る室もあつた。隣に一軒家があり、下が福音会の食堂で、賄いをする日本人夫婦がいた。

米山がサンフランシスコにきて、まず世話になり、拠点としたのはここである。『先駆九十年 美山貫一と其時代』（今泉源吉著 昭17.12.18）のなかで、このころの会員の横顔が紹介されている。米山についていえば、「米山梅吉はきれいな顔の人」というほんの形だけの一言である。まだここに来て間がなかつたわけである。

1889（明22）年7月ころ、リバイバル（信仰復興）という世界的に波及した宗教的な変異現象があつた。きわめて狂信的な状況で、福音会の会員の中にもこれが及び大変な騒動が持ち上がつた。ハリスは、あまりの狂信に陥るのを憂えて、若者達に東部へ神学の勉強に行くことを勧めた。しかし、狂信的な者は、これに従うことはなかつた。

1890(明23)年12月、教会側であるハリスから、福音会を解散して、教会がその事業主体となるという申出があった。これに対し、会員の中では、解散不可との主張が強かった。同年末から翌年1月にかけて、三夜にわたって議論をした。存続派が多数で、存続という結論となつた。これに対し、ハリスから、存続する以上教会の建物から分離して、他へ移転せよということになり、福音会は、1891(明24)年1月末、ゴールデン・ゲート・アベニューに移転した。ここに、福音会は、教会とは全く別個の団体として続けられことになった。このときの会長は安我子久太郎、幹事は米山であった。

福音会は、その前後が最盛期であったのかもしれない。その後、いくつかの変遷を経て、1906(明39)年4月のサンフランシスコ大地震の後も続いていたが、その後自然消滅の途をたどつた。

在米日本人会の編集になる『在米日本人史』(昭15.12.20)がある。これは、1300頁にも及ぶ膨大なものである。一部の学者からは、事実の認識について、脚色があるなどと批判されているが、これを承知で、引用すれば、この福音会は、「漸次發達して桑港日本人學生の中心となり、寄宿舎を有し、新渡米者の世話、職業紹介等に盡す所極めて多く、桑港大震災後迄存續した。福音会は、在米日本人發展上、最も意義ある團體であつて、後年在米邦人の指導者的人物の主なる者は、皆此の福音會より出立しているのである」といわれていた。また、『先駆九十年』は、「福音會は、桑港に於て、領事館と相並んで日本人の代表機關であった」と表現している。

福音会は、当時渡米した苦学生達の身と心のよりどころであり、次の飛躍への跳躍台であった。

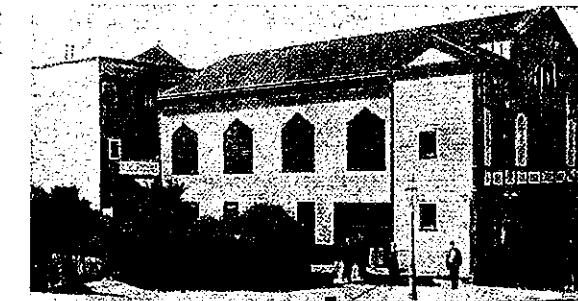
#### 【米山の福音会へのかかわり】

・米山の役職など 福音会は組織体であるから、当然役員がある。ただ、会則の全文が確認できるのは、当初のものと1890(明23)年9月の時点で効力のあつたものだけである。当初のものは、先にも記したように極く簡単なものである。後者のものは、1890(明23)年9月発行の月報第1号に記載されているもので、比較的整備されている。ただ、これがいつ制定されたものであるか明確でない。

これによれば、福音会の役員には、会長、副会長、書記(2名)、会計(2名)、評議員(5名)があった。以前は、評議員を代議員または代議士としていた。そして、1886(明19)年7月からは、役員としての位置づけではないが、選挙で庶務委員が選ばれていた。

役員は、任期6ヶ月で、6月、12月、会員の選挙によって選ばれる。福音会の会員は、皆、志をもって渡米した若者である。ここを足がかりとして、それぞれ次の段階を模索している者である。仕事の面、修学の面とそれぞれずっとサンフランシスコに滞在することであろう。

ではない。それだけに、出入りが激しい。このようなことを考えての、6ヶ月の任期なのかもしれない。その以前も役員は、慣例上、2期以上継続できないとされたが、必ずしも厳格に守られていないようである。この会則で、役員は、2期以上継続できないということが明記された。これは、ある特定の人が継続して役員となると、権力が集中するという考えよりも、1人の人に負担が偏ることのないようにとのことを慮つてのことであろう。役員は、会員の選挙である。一生懸命、会のために尽す人は、当然皆から信頼され、いつのときも選挙される。そのようなことのないよう、規則で縛ろうとしたものであろう。



桑港日本人美以教会  
サンフランシスコ大地震後のもの

第3条に、「本会ハ桑港日本人美以教会ニ属シ同教会総理[当時ハリス]ハ本会ノ監督タルモノトス」という規定がある。福音会のメソジスト教会との関係が明確に示されている。これが設けられる前であつたろう、1886(明19)年7月、ハリスから、正副会長は本教会員に限るべしとの提案がなされた。一部の会員には唐突な感じで受止められたようであるが、結論的にはこれが承認された。この会則では、正副会長は、「誠実ナル基督教信者ニシテ一期以上本会ノ役員ヲ務メタルモノトス」(第4条)とされていた。この規定は、美以教会員とされていないが、当然、このことを予定してのものであろう。

役員としてではないが、1884(明17)年7月から常務として、幹事がおかれた。福音会は、寄宿舎を持っている。相当数の部屋であり、ここに出入りする人数も多く、これを処理するのは、通常の役員としての仕事ではまかないきれない。このため、会務とは別に、日常的な業務を処理する必要があった。専任の担当者という位置づけである。そして、単にここに一時的に宿泊する者だけでなく、寄宿する者の面倒を見る必要もあった。いわば舍監のような仕事をする必要もある。したがって、これには、しかるべき人物を予定していた。この面からも、役員の任期が6ヶ月であるのに、幹事は1年であり、選挙も会員ではなく委員会でのものであった。この幹事の選任については、監督の認可が要求されていて、事実上正副会長と同じような制約が課されていたことであろう。

幹事には、給料が支給された。最初のころは、1ヶ月30ドルであったが、次第に下げられ、20ドル、15ドル、米山が幹事を務めたころには、10ドルであったが、その後15ドルとなった。事務が分担され事務量が減ったのか、それとも会の財政事情から奉仕的な面が出てきたのか。

このような役員選任規定の状況のなかで、米山は、1887(明20)年11月福音会に属するようになった後、1888(明21)年9月1日に庶務に選挙された。庶務委員が何をするか明確でないが、おそらく書記の手助けであろう。さらに、1889(明22)年3月1日、書記に選挙された。

1889(明22)年6月1日に選挙があり、米山は書記に再選されている。このときは、2期続けてその役員に就くことができないという規定ができていたが、現在就任している者は、今回限り、2期可とするとされた。

その年12月7日選挙があつて、庶務となつた。もう続けて書記となることはできないが、何か役員として関与させたい、しかしことく副会長にするには早い、何らかの形で、米山の能力を使いたかったということのあらわれではないだろうか。

その後、翌年1890(明23)年6月から7月に書記に選ばれた。その年9月、福音会は、月報を発行するようになった(5号からは会報)。これは、おそらく、米山の発想であろう。その1号の冒頭に福音会の沿革が相当な長文でまとめられている。いかにも美文調のものである。「沿革史」の原資料を整理、編集した文倉平次郎は、「福音會月報第一號には簡単な福音會沿革が書かれている、米山梅吉氏の筆と思ふ。」としている。

この年の暮れから翌年1月にかけて、後に触れるように、福音会にとって重大な事態が発生した。そして、1891(明24)年1月から、幹事を務める。米山は、幹事として、新生福音会のため、大車輪の動きをし、かえつて、福音会の基盤が固まることになる。

米山は、1891(明24)年7月、東部に赴くことになり、幹事を辞任した(幹事の任期は1年)。このときの東部での動きははっきりしない。わずかに、会員消息の欄に「古閑次郎氏は米山梅吉氏の招きに應じ去る八月中旬再び Pueblo に赴れたり」とあるだけである。Pueblo は東部ではないと思われるが、この後、東部に行き修学をしたのであろうか。翌年1892(明25)年5月には、サンフランシスコに戻っていた。

そして、米山は、その5月、会長に選挙された。しかし、これを辞退している。いまだ若く、任にあらずと考えたのかも知れないが、それよりも、就

学を予定してのことであろう。9月9日ベルモントに赴いた。ベルモントの学校は、大学にはいる準備のためのものである。ちなみに、ベルモントは、サンフランシスコから南に30kmほどのところの町である。当時の交通機関の状況では、毎日通える距離ではない。

このあたりのことは、次のように考えられないであろうか。米山は、修学のため、一端東部に行つたが、入学資格の関係で米山の思うようなことではなかった。それでサンフランシスコに戻り、その近くのベルモント・スクールで修学、大学入学の資格を万全として、1893(明26)年、再度東部に赴いた、と。ただ、これはあくまで想像の域出ない。

米山は、1893(明26)年6月までには、ベルモント・スクールで修学を終え、サンフランシスコに戻った。そして、6月9日の選挙で、副会長に選任された。しかし、東部に赴くについて、すぐの15日に辞任した。米山は、そのあと帰国間際まで、東部にあり、福音会の役員や例会の出席をしていない。

その後の米山の東部での状況は、はつきりしない。福音会の資料で、東部での動向をうかがえるのは次のものだけである。

1893(明26).06.15 の臨時総会の記事 「米山副会長並に……知加護[シカゴ]に赴かれたり」

1893(明26).08.05発行の月報の記事 「米山氏は工藝館に」 [シカゴ万博での説明員]

1893(明26).12.02の例会記事 「荒居、木谷、米山三氏はオハイオ州クリーブランドに、何れも商店を開かるゝと」

1894(明27).09.01発行の月報の記事 「米山梅吉氏はロチェスター[大学]に……皆夫々勉励中の由」

1894(明27).11.25発行の月報の記事 「米山梅吉氏はロチェスターに」

1895(明28).06.25発行の月報の記事 「米山、秋山の両氏はロチェスターに」

#### 米山役職表

年月	明21 1888												明22 1889											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
庶務																								
書記																								
幹事																								
副会長																								
会長																								

年月	明23 1890												明24 1891											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
庶務																								
書記																								
幹事																								
副会長																								
会長																								

年月	明25 1892												明26 1893											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
庶務																								
書記																								
幹事																								
副会長																								
会長																								

(会長に選任されたが辞退)

(6/15辞退東行)

9/9ベルモントへ

5~10月シカゴ万博

以上のように、米山は、1887（明20）年11月福音会に属するようになり、1888（明21）年9月1日に庶務に選挙された後、サンフランシスコに滞在しているときは、何らかの役員を務めている。その経過は、13頁下段の表のようである。

なお、米山は、福音会においてだけでなく、外部の活動にも、積極的に参加している。当時のサンフランシスコでは、邦人も多くなり、いくつかの邦人団体ができていた。それも主義、宗教、業務、出身地を中心としたものなど雑多であった。そのなかで、特に宗教、主義に関連しての対立は酷かった。

領事が藤井三郎から河北俊弼に代り、河北は、これら「分裂する同胞の状態を嘆き」、団体が大同団結することに動いた。同舟会、愛国同盟、海外実業界、工業界、福音会などを合わせて、日本人会を作ることとなつた。それぞれの会から2名の代表がされることになり、米山は、福音会の代表として発起人となり、選挙で日本人会の事務員2人のうちの1人となった。米山は、ここでも、日本人会結成、運営の中心的な役割を果している。

ちなみに、会長は、新たに領事となった珍田捨巳であった。珍田は、領事がこのような会の会長になってもいいのかという意見に対し、領事も在米日本人だから不思議はないといって、平然としていたといふ。

・米山の演説 福音会は、会員を切磋琢磨、人格陶冶のため、例会で演説をさせたり、ある題について、会員同志を二つに分けて、それぞれの立場で討論をさせてている。米山は、演説が好きである。臆せず、自分の意見を開陳する。米山は、以下に見られるように多數回にわたって演説をしている。他の会員の演説もそうであるが、米山の演説の内容は、多岐にわたっている。今この内容を知ることができないが、これがわかれれば、若いときの米山の考えを知ることができるのであるが、残念である。ただ、後の米山に対する評価の文章などからして、内容は、穏当、妥当なものであつたと考えられる。

1888(明21).04.07 「某紳士の言を怪む」

1889(明22).05.18 「社会に立つべき覚悟」

1889(明22).06.29 「自今教会及福音会の上に起れる困難の処置法」

1889(明22).08.17 「大沢田中両氏の東行に就て」

1889(明22).12.21 「日本文学上の管見」

1890(明23).08.16 「米国前途の困難は必ず移住民の問題に起らん」

1890(明23).09.13 「文部省を廢する可否」

1891(明24).06.20 「会員に対する将来の希望」

1891(明24).07.11 「事実と真理」

1892(明25).07.09 「合衆国民の紀念」

1895(明28).10.06 「桑港の現状、日清戦争の東部に与へし反響等」

・米山とハリス 米山は、1890（明23）年の多分7月から書記を務めた。そして、翌年1月から幹事である。福音会にとって、1890（明23）年12月から翌年2月までは、大変な時期であった。それは、以前少し触れたが、監督であるハリスが福音会を美以美教会と合体すると提案したことによるその後の処理である。

ハリス（メリメン・コルベント・ハリス）は、1846（弘化3）年、米オハイオ州の生れである。メソジスト派の大学神学科を卒業する。

同級生と結婚したが、その新婚旅行が日本への伝導の旅であった。ハリスは、米国メソジスト監督教会が日本へ送った最初の伝道者で、1873（明06）年12月14日来日し、翌7年1月、函館で布教活動をする。函館の米国名誉領事も兼ねていた。人格高潔、大変な日本びいきで、日本のよき理解者であった。米山は、このハリスを敬愛していた。

そのハリスがサンフランシスコ日本メソジスト教会の総理となっていた。福音会は、そのハリスから、福音会を解散し、その事業を教会が行なうことの提案をうけた。

これについて、存続派と解散派が大変な激論となつた。ハリスのいうのは、次の三つである。①教会が建築費募集中で、福音会を続けるときは、全体として負担が大きくなる。②将来、教会と福音会が衝突するかも知れない。③福音会の組織は、教会の目的に副うものでない。

この投げかけは、当然のごとくすぐに結論の出る生やさしいものではなく、12月29日に委員会を設けて議論し、翌1891（明24）年1月2日に総会を開き、夜の11時まで議論、さらに翌2日にも開かれた。

存続派は、②、③は、今に始まったことでなく、今までうまくやってきたのであり、将来もそのような恐れはない。①については、福音会も経費節減に努め新たな事業を控えているし、仮りに存続することの利益が大きければ、それくらいの負担はいとわない、というようなことで、反論をした。その結果は、出席56名中25名対31名で解散を否決した。米山は、存続派である。

このころ、福音会を設立、導いてきた美山は、1890（明23）年1月には、サンフランシスコを発ち、2月に帰国していた。その後、福音会の実質的指導者は、安孫子久太郎であった。美山がいたならどのような対応をしたか興味のあるところであるが、ハリスの提案



メリメン・コルベント・ハリス

は、ある意味それほど理のあるものとは思われない。学者は、ハリスの教義普及の便ということではなかつたかといふ。

ハリスは、福音会が存続する以上、教会の監督より分離し、独立することを求めた。福音会は、これを容れざるをえなく、この移転処理のために、会長の安孫子、米山ら11名が委員に選ばれる。このとき、米山は幹事で、その後の移転先を探したり、その移転準備、新しい規則の制定、移転披露式の準備にと追われた。ようやく1891（明24）年1月31日、ゴールデン・ゲート・アベニューに移転できた。

その後のハリスや解散派の人との関係であるが、それぞれ思惑があるとしても、お互いに気を使い、うまく融合して、良好な関係が続けられることになる。この移転披露式には、ハリスも出席し、挨拶をしたりした。そして、解散派も依然福音会の会員となるものもあり、会員の総数は、57名になった。一方、福音会の会員には、メソジスト派教会の信徒である者もそうでない者もあったが、信徒である者は、教会のサークルである組合に参加していた。移転後は、福音会の建物でその会合を持ったりした。

米山は、帰朝後、キリスト教信者という色を出していない。このときはどうであったか。先のように福音会の会則では、正副会長は、「誠実ナル基督教信者」であることが定められている。そのなかで、米山は、会長、副会長に選挙されている。選挙に際しては、それらに選挙される資格のある者が公示される。また、教会信者で結成されているサークルである組合の会計や組長をもつとめている。したがって、米山は、当然信者であった。佐々木邦は、「創意と奉仕の一生」のなかで、リバイバルの折り、ハリスから洗礼を受けたものであろうと察しられるという。そして、自分は俗人だとしばしば言証をしていたといふ。

#### 【おわりに】

米山は、福音会で、そして在留日本人の間でもその能力を發揮し、八面六臂の活躍をした。会員の間で、多大な信望を得ていた。米山は、1891年（明24）年1月から幹事であった。その年7月、東部に赴くことになつた。その送別会が7月15日に開かれた。そのときの記事である。長い全文を記載してみる。

米山梅吉氏東行 七月十五日は永く本会の幹事若しくは諸役員として尽され且温厚篤実を以て内外に信愛せられたる米山氏東行の送別会を本會内に開けり 會衆數十名 先づ奥山氏の祈祷を以て開會し 次に浅野三弥氏会員總代として懇切な別辭を述べ 米山氏の別辭を聞り 柔和篤行の令名ある氏にして 無限の愛情別辭の教訓に含み 平素すら氏の性行を 鉴慕ることの豈此の時に於て誰れ乎情の切ならざるものあらん 十余名の來會者各々別辭を述べ 情通り意充ち多くは思ふ所を云う能はざらしむ 十時前

笹尾氏の祈祷を以て閉会す 此夜会員外にして来会せられしは池田政次郎君、中村寛次郎君、竹川藤太郎君の諸氏及び教員諸氏等なりし

米山は、会のためそしてその外において、惜しまず尽力し、その人柄とあわせて、内外から高い信望をえた。

このときの滯米、サンフランシスコ滞在は、あらゆる面で、その後の米山の人生において、有意義であった。とりわけ、その人脈の形成においてそうである。異邦の地にある者同志である。しかも、志のある有為な若者達である。このときの人脈は、後に大変な糧となつた。

米山は、1920（大09）年10月20日、東京ロータリークラブを創立した。この時点での創立会員は、24名である。このなかに、福音会の会員であった人が何人かいる。

藤野正年である。藤野は、1891（明24）年、20才で渡米、2月に福音会の会員となっている。1893（明26）年には、幹事もやっている。

藤原俊雄である。1888（明21）年11月入会し、1891（明24）年には副会長を務めた。

星一がある。1894（明27）年11月の入会であり、米山は、このころ東部に行っていたので、福音会での直接的な交際はなかったであろう。

北島亘がある。1884（明17）年に16才で渡米。オークランドに住み、福音会オークランド支部に所属していた。

伊東米次郎であるが、伊東は、1881（明14）年分派したタイラー福音会に属し（その以前、福音会に属していたか不明）、その会頭を務めた。

福音会の会員ではないが、このころサンフランシスコに滞在した者に、和田豊次がある。和田は、慶應大学卒業後、福沢諭吉の影響で、1885（明18）年に渡米、1891（明24）年1月に帰国した。他に井上敬次郎がある。特異な経歴であるが、米山がサンフランシスコに滞在中、やはり、滞在していた。倉地誠夫も1890（明23）年サンフランシスコに行っている。

米山は、東京クラブを創立するについて、その会員の選定について、国際感覚を身につけた人ということを一つのハードルとした。人選について、この青年時代サンフランシスコに滞在していたときの人脈も大いに活用したわけである。

追記 米山は、福音会会員時代、『蒸氣船』という新聞を発行した。そのことも触れたかったが、それだけで相当な長文となるので、『蒸氣船』のことは別の機会としたい。

# 米山梅吉記念館秋季例祭のお知らせ

日 時 平成23年9月17日（土） 午後2時～  
場 所 米山梅吉記念館  
新幹線三島駅よりタクシー5分 東名沼津ICより20分  
内 容 例 祭  
講 演 [講師] 植田新太郎 氏 (東京RC)  
[演題] 「振り返れば奉仕の道」  
アトラクション 懇親会  
多くの皆様のご来館をお待ち申し上げております。

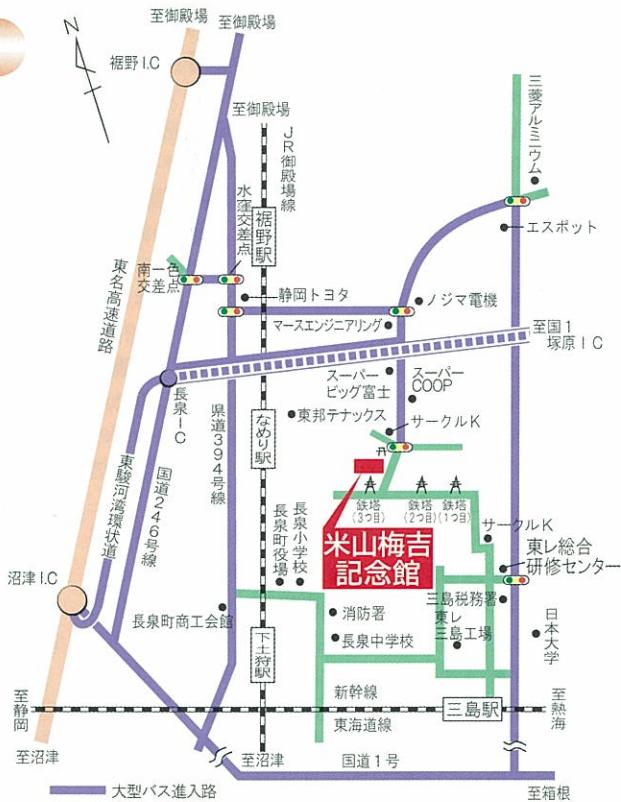
## 米山梅吉記念館のご案内

### 開館時間

午前10時～午後4時

### 休 館 日

- 月曜日
- 12月28日～1月4日
- 整理のための休館日  
(5月・8月の特定日)



米山記念館及び館報へのご意見、ご感想、寄稿等お寄せ下さい。

米山梅吉記念館 館報

Vol. 18

発行日 平成23年8月10日  
発行者 公益財団法人米山梅吉記念館 理事長 渡邊脩助  
〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1  
TEL (055) 986-2946 FAX (055) 989-5101  
URL : <http://yoneyama-umekichi.jp/>  
e-mail : [yumh@ai.tnc.ne.jp](mailto:yumh@ai.tnc.ne.jp)

印 刷 フタバ印刷株式会社